



三枝和子
saegusa kazuko

福武書店

半満月
空になど
かか
つて





三枝和子（さえぐさ・かずこ）
一九二九年、兵庫に生まれる。関西学院大学文学部卒。七〇年、処刑が行なわれている中で第一〇回田村俊子賞受賞。八三年、鬼どもの夜は深い」で第一一回泉鏡花賞を受賞。著書として「珈琲館木曜社」「思いがけず風の棘」「野守の鏡」「隅田川原」「丹波夜能」「月の飛ぶ村」などがある。

半満月など空にかかって

一九八五年二月一二日第一刷印刷

一九八五年二月一五日第一刷発行

定価一四〇〇円

著者 三枝和子

発行者 福武哲彦

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二二三一八
〒三〇三電話（三）二二〇一・二二一
振替口座（東京）六一〇五〇九七

印刷 図書印刷

製本 加藤製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

目次

・ 天沼三丁目の月

7

・ シルクハット 73

・ 善福寺川公園受胎

99

・ キャベツ 135

・ 四面道の赤ん坊

159

・ パレット 197

・ 教会通り午前二時

227

裝丁菊地信義

半満月など空にかかつて

天沼三丁目の月

天沼三丁目に今度新しく出来た駐車場には、どういうわけか古タイヤが山と積まれている。駐車してある車はいつも四、五台で、古タイヤの占めている場所の方が、車が置かれている空間より広かった。

駐車場の管理人は誰か分らない。入口に鎖がかけられているだけで、管理人室はない。ただ、駐車場にめぐらされている金網に掲示板がぶら下げてあり、駐車したい方は、左記に電話下さいと、右下りの字で書いてある。

入口の鎖は地上一米くらいの位置に張られて居り、車の出入はできないが、人間は自由に往来できる。そのため、昼間はおぼろ近所の子供たちの遊び場になっている。子供たちは古タイヤの山によじのぼり、トンネル抜けや迷路ごっこや、その他さまざまの遊びを發明した。

噂は、子供たちの口から出た。

「おれ、見たんだもの」と一人が言った。

「ぼくも見たま」

「おれだって」

「あたしも」

「塾の帰りだったんだ」

「あたしはお風呂帰り。一緒に見たのよね」

「うん」

それで決定的になった。

夜になると古タイヤの山の上で、女が一人、編物をしている、というのだった。

女は帽子をかぶっていた。年齢は不明だ。娑恰好から老婆のようだが、案外若いのかも知れない。駐車場の街燈のせいで、女の顔は、ひどく青白く見えた。時折手を休め、大きな溜息をついた。

女の操っている編針は、その指ほどもあろうかと思われる太さだった。女が毛糸をかけるとき、指ともつれあって、一瞬、無数の編針が躍っているように見えた。

毛糸は藤色だった。白だ、と主張する子もいた。手に持っているときは白く見えるのだが、編むと薄い藤色になる。

「大きなセーターだったよな」

「ちがう、ショールだ」

「マフラーじゃないの」

「あんな幅の広いマフラーがあるものか」

女は時折、編みあがりを確認するためか、針を目の前まで持ちあげた。幅四十糎、長さ七十糎くらいの藤色の編物が女の顔を隠した。顔の前で、女はその編物を、二度、三度、ゆらゆらと前後に振った。それから膝に戻し周囲を見廻した。ふっ、と声にならない声をたてて笑った。泣き声のように聞こえるが笑い声なのだ。古タイヤは、およそ十五、六個積みあげられて居り、その上に坐っている女はまるで牢名主に見えた。

女の帽子の色を、不思議に誰も覚えてはいなかった。青だった、と言う者があり、黄色だと頑張る者がいた。

「白じゃあなかった」

「うん。緑色みたい」

「よく見なかったんだろ。目をつぶって走り抜けたんじゃない？」

「黄色じゃないさ」

「だって、青でもなかったよ」

「思い出した！」

「あたしも！」

「赤よ。赤だったわ」

「……………」

みんなは一斉に息を呑んで、しいんとなる。赤だ、赤にちがいないと思えて来る。

赤い帽子の下の女の顔が幽霊のように蒼ざめていたのだ。

真夜中だった。遠くで酔払いが調子はずれの歌を怒鳴っていた。月は望に近い上弦で、欠けている部分から雲が次々と吐き出されて、早い速度で流れていった。

寒くはなかった。春を思わす柔らかな風が、ふわり、ふわりと月をあおりあげていた。あおられて、月はいま駐車場の真上だ。女は赤い帽子をかぶり、相変らずゆっくりと編物を続けている。藤色の肩掛らしいものは、すでに女の膝から滑り落ち、上から一段目の古タイヤの縁にまで達している。

子供たちは、いまはそれぞれの家で眠っているにちがいない。女は大きな溜息をついた。古タイヤの上から周囲を見廻し、独り笑いをした。笑うと女の顔は一瞬頼りなげになった。

——あったかい夜ねえ。

女は呟いた。意外に若い声だった。しかし仕種は老婆のようで腰をかばって坐り直し、緩慢な動作で毛糸を手繰り寄せはじめた。ゆっくりと、闇を指先でからめとるようにして、女は編んでいった。

濡子は歩いていた。

「……………」

微かな、忍び泣きのような声が道の両脇から聞こえて来た。道の両脇にはシャッターを下ろした商店が並び、忍び泣きは、そのシャッターのなかから洩れて来るように思えた。

漑子は後ろの足音を確かめながら歩いてた。足音は、さっきから一定の距離をおいて、ずうっとあとをつけている。あとをつけながら、ぶつぶつ呟いている。道の両側の忍び泣きに合わせながら、ぶつぶつ呟いている。

「大丈夫だよ、皆辛いんだから。大丈夫だよ、ぼくをごらんさい、そのうち死ぬるから。そうなんだよ、死ぬんだぜ」

その声には聞き覚えがあった。聞き覚えはあったが振り返ると厄介なことになりそうなので、そのままどんどん歩いていった。

「ふっ、ふっ、ひいっ、ふっ、ふっ」

後ろの足音は、今度は笑い出した。その笑い声は独得だった。唇の先で撥ね飛ばすように笑ってからすぐさま喉の奥で噛み潰す。噛み潰された笑い声は、だから時折喘息のように悲し気に尾を曳く。カンノサンだ。違う。

その男を、皆は、カンノサンと呼んでいた。どんな字を書くのか漑子は知らない。「神野」だろうか、それとも「菅野」あるいは「管野」か。おそらくその店の常連客のなかでも知っている人はほとんどいないのではないか。その店に限らない。どこの店でもそうだろう。カンノサンは鼻つまみものなのだ。

酔っ払うのはいいよ、金さえ払えばね。

そうじゃないのよ、お金払いたくないからべろんべろんになるのよ。

漑子は取りたててカンノサンが嫌いではない。もちろん好感など持っていないし、なる

べく関わりあいにはなりたくないと思っではいるが、怖気をふるって逃げ出す、というほどではない。ぼんやり遠くから眺めているぶんには、あまり気にならない男だ。

「……別に不思議じゃあないんです。ああそうかな、って受け入れてしまえば、どんなことでも不思議じゃあ、なくなります。そう。そうなんです。ぼくは、そう思ってるから、そのうち、不思議でなく死ねるんです」

「……………」

滯子は振り返らない。歩調を緩めずそのまま歩いて行く。

カンノサンは滯子に向って話しかけているわけではない。しかし独り言でもない。カンノサンはいつだってそうなのだ。話しかけるわけでもなく独り言でもない言葉を、低い元氣のない声で繰り返す。

「誰^だれも知らないんですよ。ぼくが不思議でなく死ねる、ってことを。ほんとだよ。不思議でなく死ねる、って、難しいんだ。ふっ。ふっ。滯子さんなんかにはできないよ。ふっ。ふっ。あんたは滯子さんでしょ」

「……………」

それでも滯子は振り返らない。——あんたは滯子さんでしょ、と言っではいるが、カンノサンが話しかけているわけではないことは明瞭だ。

商店街の終るところで道は三叉路になって居り、駐車場はその左手をとってしばらく歩く。病院があり小学校があり、その突きあたりだ。病院も小学校も、いまは巨大な黒い山の